自転車日本一周

酪農家　吉川友二

今年は八月半ばから一日一回搾乳を始めた。いつもの年ならば放牧草がなくなる十月の終わりまでは朝晩の一日二回搾乳をしている。

また今年はいつもよりも一週間早く十二月十日に全頭を乾乳に上げた。これで分娩が始まる二月の終わりまで搾乳がなくなる。

乾乳に上げて、今年の自転車の旅は一週間早く出発した。今回の旅の予定は、前回の旅の終着地の鳥取から石川県の小松までである。冬の日本海岸は雪が降るので、できるだけ早く旅に出たかった。

沖縄一周の自転車の旅から始まって、今年（二〇二一年）で十回目の旅になる。五十七歳になった。今年は夏に膝を痛めた。膝が痛かったのだが、身体が温まると膝の痛みが和らいだので、ランニングをしすぎて膝の痛み

を悪化させた。歩くのも痛くて大変になる。八月にお医者さんに行ってＭＲＩの撮影もしたが、異常がない。膝を支える筋肉のトレーニングのリハビリを教わった。昨年（二〇年）は秋に野球をやっている最中に股関節周りがしびれて足が動かなくなった。お医者さんに行くと脊柱管狭窄症と腰椎すべり症であると言われた。それから二年近く処方をされた薬を飲んだ。二年前には手が思うように動かなくなってお医者さんに行くと頚椎症と診断されて手術をした。

股関節周りが時々しびれたり、膝の痛みもあるが、自転車の旅はできるまでに回復をした。本当に人間の身体回復力には感謝しかない。

自転車に乗りたい、野球がしたい、山に登りたい、スキーがしたい、スケートがしたい。病気が治るまで気長に待つしかないが、この遊びたいという強い思いが自然治癒力を高めているかもしれない。

十二月十二日（日）

帯広空港から鳥取市

今年は全く雪がないので、まだ放牧をしている。朝の仕事を六時半までしてから家を出発する。

帯広空港八時五十五分発の飛行機に乗る。今年はポテトライナーで千歳空港まで行くバスの旅がないので少しさみしい。なぜだろう。バスに乗っている時間は二時間余りではあるが、移動の最中に何もできない時間が贅沢に感じられるのだ。何もできないから外の景色を眺めたり、『まっぷる（旅行雑誌）』を読んだり、うとうとしたり、そんな時間だ。家に居ると、なんでもできてしまう。ボケーっとテレビを二時間見てもいいし、本を読んでもいい。でもなんで家の二時間は旅のバスの二時間のように贅沢に感じられないのだろうか。家にいてもバスに乗っているつもりになってみよう。

離陸した飛行機の窓から十勝平野を見下ろすと、雪が全くない。耕した畑の黒茶色と秋蒔き小麦の霜で少し白っぽくなった緑色のパッチワークになっている。襟裳岬がきれいに見える。機内サービスのコーヒーも飲まずにいつの間にか寝てしまった。目覚めると眼下は東京の手前にあるゴルフ場の密集地帯であった。着陸前には六合目から上が真っ白に雪化粧をした富士山が見える。

羽田空港ではまず本屋さんを探す。『まっぷる　城崎（きのさき）・天橋立・竹田城跡』を買う。兄に「「ブラタモリ」（各地をタモリが訪ねて地質学的なその土地の成り立ちを紹介するＮＨＫの番組）の本が出ているからそれを読んでから旅に出たらいいよ」といわれているが、今回も今から『まっぷる』を読んで旅の下調べをすることになる。ハラリ氏の『21Lessons』が文庫化されたという広告が目に入って『21Lessons』を買う。二年前の自転車旅の帰りに関西空港で買って千歳空港で失くした

本だ。その後オーディブルという朗読配信で英語の朗読を聞いたが翻訳で読んで内容を確認したい。（テントの中で読もうと自転車旅に持っていったが、結局全く読まずに家に持って帰ってきた。）

鳥取砂丘コナン空港に十四時三十分に着陸。空港から鳥取駅へと向かうバスの窓から見える河原の土手の草の緑色が輝いて見える。

駅前のビジネスホテルの部屋の中で自転車を組み立て、明日の荷物のパッキングをする。去年の旅で鳥取県の倉吉でお世話になった食堂のおかあさんが、素敵なメモ帳をプレゼントして送ってくれた。そのメモ帳を荷物の中に入れる。今まで旅の最中に記録を取ったことはないが、いただいたのでできるだけ活用したい。

ホテルの外へ出ると、街はもう暗くなっている。冬の細かい雨が降り始めたので、アーケードの下を歩く。アーケードにある本屋さんに入ると、店主さんのこだわりの本が棚に並んでいる。これだけ店主さんのこだわりの本をそろえた本屋さんは初めてだ。去年行った居酒屋さんへまた行くのが楽しみだったのだが、休日であった。

ホテルに帰ってベッドの上で『マップル』を読んでいると電気をつけたまま寝てしまう。

十二月十三日（月）

鳥取市から兵庫県香住（かすみ）

大学の水産学部の時の友人の川辺に、鳥取から小松までの間に住んでいる水産学部の友達はいないかと聞いておいた。川辺は水産新聞の記者をしているので情報通なのだ。今日は香住に住む山下に会う予定である。

ホテルから出てすぐに千代川の河川敷を走る自転車専用道路（因幡（いなば）自転車道）を見つける。河口に近づくと道は右に折れて住宅街を縫うように鳥取砂丘の丘を上りはじめる。住宅がなくなり鳥取砂丘に入ると自転車道は終わり、一般道路に出る。

砂丘への入り口なのだろうか。小さな看板がある。誰もいない。入り口には人を数えるカウンターが付いている。自転車を降りて歩いていくと竹垣で砂丘を碁盤の目のように区切って植林をしてある。そこから海を見下ろす。冬の朝だからだろうか、砂丘には誰もいない。

車道には砂が三センチくらい、ところどころで吹きだまっている。鳥取砂丘は広大なところというイメージがあったので、自転車で走っているとあっけなく砂丘が終わってしまって肩透かしを食らった。

海岸沿いの平坦な道を走って、いよいよ道が山の中へ入っていくというところで雨が降ってくる。天気予報では雨マークがなかったので、合羽を着るかどうかで迷うが、ちょうどバス停の小屋があったので、その中で少し雨宿りをしてからあきらめて合羽を着る。走り始めるとすぐに雨が弱くなってきたので、中から汗で濡れるより

はと合羽を脱ぐ。この駟馳山（しちやま）峠を下り始めると八基もの古墳が集まる小畑（こばたけ）古墳群が出迎えてくれる。

網代（あじろ）漁港を過ぎるといよいよ本格的なリアス式海岸の断崖になる。こんなにきつい上り坂は今までで初めてじゃないだろうか。自転車から降りて歩こうか。でも毎年今年が最高にきつい坂だと思って坂道を登っているんじゃないか？などと、自転車をこぎながらも、いろいろなことを頭が勝手に考えている。

海岸におりてまた上りが始まる所に「山陰海岸ジオパーク　海と大地の自然館」という看板がある。通り過ぎてから自然館に寄ろうか迷いながら坂を上る。リアス式海岸という言葉は知っているけど、それって何だろう。坂の途中で引き返す。ところが残念、休館であった。（注）鳥取市の東にある白兎（はくと）海岸からこれから行く丹後半島の先端の経ヶ岬までが「山陰海岸ジオパーク」の範囲である。もともと日本列島は大陸とくっついていたのだが、大陸から引きちぎられてできた。そのちぎられてできた海岸線が山陰海岸ジオパークなのだ。）

「自然館」から二つ目の峠は七坂八峠（ななさかやとうげ）という。七つの坂と八つの峠とは。私の今日の苦労を一言で言い表してくれる。この峠を登り切ったところに「ようこそ但馬（たじま）へ「コウノトリ翔（かけ）る郷」兵庫県」と書かれた看板がある。「但馬」ってどこのこと？なんで「コウノトリ」なの？

（注）但馬とは兵庫県の北部をさす。コウノトリは但馬の豊岡盆地で日本最後の野生のコウノトリが一九七一年に絶滅した。そして現在、豊岡市にある「コウノトリの郷公園」ではコウノトリの保護・増殖をしてコウノトリの野生復帰を目指している。豊岡市にある空港は「コウノトリ但馬空港」という。豊岡盆地に最後までコウノトリが生き残ったのは、江戸時代に藩主から霊鳥として保護された伝統があったからしい。）

また峠を越えると浜坂漁港である。峠を下りきったところに、高いビルがある。ビルの周りの狭い駐車場は車が一杯だ。ビルの正面へと道を左に曲がると玄関の上には大きなカニがロッククライミングをしている。一階は鮮魚店になっていてお客さんで賑わっている。

ここでお昼ご飯を食べる。今朝出発する時には、お昼までには山下のいる香住に着いてしまうのではないかと思っていたが、香住はまだまだ先である。食堂の窓から「山陰海岸ジオパーク館」という看板が見えるが立ち寄る余裕がない。

食事の後で鮮魚店へ行って、松葉ガニを足寄の家におくる。ズワイガニの雄のことを取鳥、兵庫、京都では松葉ガニと呼ぶ。福井では越前ガニ、石川県では可能ガニ

と呼ぶ。妻の実家のある富山県ではズワイガニと呼び、深海で獲れる赤色をしたカニは特別にベニズワイガニと呼ぶそうだ。

地図をみると加藤文太郎記念図書館がある。大学生の時に山男であった私は加藤文太郎さんに敬意を表するために、記念図書館には行くことにする。途中お墓の案内板もあり、墓地に行ってみるが彼のお墓はわからなかった。記念図書館は一階が普通の図書館で、二階に彼の使っていた登山用具などの展示がされている。加藤文太郎さんは一九〇五年に生まれ、三十歳で槍ヶ岳の冬山で遭難死をしている。山岳図書もいっぱいあるが、展示品だけを見て館をあとにする。

ここから余部（あまるべ）までの道は海からの断崖の標高三〇〇メートル近くまで上る。余部崎（あまるべざき）灯台まで道から歩いていってみると、日本で一番高いところにある灯台だそうだ。水面から灯火まで二八四メートルであるそうだ。

ここの道は舗装がされているだけでもありがたいが、車がほとんど通らないせいか、崖の上から落ちてきた小石が道の上に散らばったままになっている。頑張って登ってから下り坂になっても小石が散らばっているので、スピードが出せない。

余部漁港へ向かって道を下りていくと、川にそった道のはるか見上げる上に鉄橋が架かっている。余部橋梁である。所々で鉄道が道路と平行に走っているところがあったが、山陰本線である。こんなところによく鉄道を敷いたものだ。是非一度山陰本線を汽車で旅をしてみたい。

峠を越えて下り坂が平らになりかけたところに、高級感あふれる温泉宿が道まで迫って立ち並んでいる。香住温泉と書いてある。友人の山下に香住に着いたことを電話で知らせる。兵庫県の水産試験場までの道を教えてくれる。山下が水産試験場の職員であることを初めて知る。ここ香住にも「ジオパークと海の文化館」というのがある。山下の職場に着いたのは五時少し前であった。

挨拶をして、職場の片隅で仕事の終わるのを待たせてもらう。隅から見ていると、どうも彼はこの部屋で一番偉い人らしい。職員の女性がコーヒーにチョコレートをつけて出してくれる。チョコレートの甘さが身体にしみていく。

公園を探して、テントを張る予定だと山下にいうと、家に泊まれと言ってくれる。奥さんと一人息子さんは神戸に住んで、単身赴任をしているそうだ。

小さな港町かと思っていたが、車で行くと立派なスーパーがある。そこで香住の地酒とおつまみを仕入れる。

三十年ぶりにあった友人の家で「鶴瓶の家族に乾杯」をテレビで見ながら、二人でお酒を飲んでいると、「こ

れはまったく学生の時のままだな」と二人で驚く。すっかり学生時代にタイムスリップをしてしまう。

十二月十四日（火）

香住から京都府宇川温泉

香住港の市場で松葉ガニの競りを見に行こうと山下が市場の予定を調べてくれるが、競りは悪天のためにどこの市場でもおこなわれない。友人は仕事もかねて、市場の競りを見に行くのが日課なのだそうだ。

出発の準備を整えて七時に外に出るともう明るくなっている。木曜日から天気が崩れるので頑張れるのは今日と明日しかない。

香住の広々とした港を見て、昨日までのようなきつい坂道はここまでで終わりだろうと勝手に思っていると、昨日とほぼ変わらない上り坂が始まる。でも景色は良いし車が通らないのでとても気持よく走れる。

泥で汚れたシカの足跡が舗装された道路に点々と続いている。ここら辺りにはシカがいるんだなと思って走っていると、今度は熊の足跡が道に点々とある。あまりにもくっきりとした足跡なので、熊の足跡に似せてペンキで塗ったのかと思う。通りすぎてから、こんな人の通らないところにわざわざ足跡をペンキで塗るはずはない、動物園じゃあるまいし。本当のクマだ。

平家の里　田久日（たくひ）という木の看板がある。小さな沢が漁港まで流れ、それに沿って細長く伸びている集落である。家々は軒が重なり合っていて、上からみると鱗のように見える。沢が狭くなり、急になったところで集落がおわり、そこから上に畑と小さな水田がみえる。山下が海岸の小さな集落はみんな平家の落人の集落だと言っていた。実際はどうだったのだろうか。そんなドラマがあったのだろうか。

山の中に城崎（きのさき）カントリークラブの看板があらわれる、そして、城崎マリンワールドがあらわれる。水産学部卒業の私は水族館があると入るようにしているが、今回は例外としてスキップする。ちょうど十時の開館の時間なのだろう。小さな子供を連れた家族連れが駐車場から水族館へ向って歩いている。

志賀直哉の小説で城崎の名前だけは知っていたが、小説の題名になるだけではなくて、羽田空港で買った『まっぷる』のタイトルの一つにもなっている。温泉街に入ると映画撮影のために交通整理をしている。それなりに観光客がいるという程度だが、すごく賑やかに感じるのは、車も通らない山の中から出てきたからだろうか。

町の真ん中を大溪川（おおたにがわ）が流れている。両岸が石垣で護岸されていて、川幅は十メートルないくらいだろうか。流れは緩やかで、透きとおっている。し

だれ柳が両岸から川に色あせた青い葉を垂らしている。川にはおもむきのある石橋が何本か架かっている。どんなに沢山の観光客でにぎわっても、この川のおかげでいつでも静かで落ち着いたたたずまいの街であることだろう。

川の両側には道があり、温泉、旅館、お店が並んでいる。城崎文芸館を探して裏路地に入ると、静かなどこにでもある町である。文芸館に「城崎　道は廊下、旅館は部屋、温泉はお風呂、みんなで旅人をおもてなしをする町」と城崎の紹介が書かれている。私の実家も上田の城下町の外れにあるが、学生の時に数年ぶりに北海道から帰省した時に、家の前の狭い道を歩く人のしゃべり声が家の中に筒抜けに聞こえてきて、内地の町は家が部屋で、道が廊下みたいだなと思ったことがある。

街を一通り歩いて城崎駅に着くと、駅から先には全くお店がなくなってしまう。自転車を押して歩いただけで終わってしまった。駅に自転車を置いて身軽になって、歩いて引き返す。天ぷら二本七五〇円。湯あがりチーズタルト三〇〇円。宇治抹茶の生バターどら焼き二九〇円。牛匠上田の但馬牛里芋コロッケ二三〇円なり。また来てのんびりと外湯（七つの外湯がある）をめぐり歩きたい。

城崎から円山（まるやま）川に架かる橋を渡って西へ向かう。橋を渡らずにまっすぐに川をさかのぼって南に行くとコウノトリの豊岡盆地が広がっている。飯谷（はんだに）峠、そして三原峠を上ると「京都府」「京丹後市」の道路標識がある。「コウノトリ翔る郷」みたいなご当地を紹介する看板が県境には欲しいと思う。この峠は三叉路になっていて、赤いペンキで左向きの矢印と小天橋（しょうてんきょう）と書かれた看板が電信柱にくくり付けてある。

道なりに下ると久美浜湾にでる。久美浜湾は砂州（小天橋）によって海への口が狭くなっていて、地図で見ると湖に見える。三原峠を下りて、久美浜湾に出たところの三叉路を左に折れて海岸へ向かう道を行くのではなく、近道をして久美浜湾の内陸側の道を行く。

ぼた餅の旗を掲げている家がある。あんこに目がない私は通りすぎてからまた戻る。戻ってみるとそれはぼた餅屋さんではなく、豪商稲葉本家の邸宅である。

この秋に東京上野にある旧岩崎邸を見学したことがきっかけで、私の中では建築物見学ブームになっている。稲葉家の邸宅を呑気に見て回っていると、宝蔵がある。宝蔵は六畳ほどの穴倉である。宝蔵の中には太平洋戦争で亡くなった長男と次男の記録が展示されている。子供の時の家族写真や、長男の出征の時の祈武運長久と書かれて人々の名前が寄せ書きされた日の丸の旗、次男の出征の時に皇風徧宇宙と書かれて寄せ書きをされた日の丸の

旗、兄弟の死亡通知書などが大切に保管・展示されている。いきなり太平洋戦争の時代に投げ込まれてしまう。次男はビルマのインパール作戦で戦死された。長男は次男の戦死の直後に召集されて沖縄戦で戦死をされた。長男の出征の時は、ご家族は次男の戦死のことを知っていたのだろうか。

邸宅の座敷で、座敷の造りとガラス戸越しに見える中庭を見ながら、ぼた餅だけのつもりが、丹後地方の郷土料理であるばらずし（ちらし寿司みたいなお料理）もいただく。

ここら辺りは酪農家がおおいのだろうか。「丹後ジャージー牧場　ミルク工房そら」、「村上牧場「Acacia Farm」」でたて続けにソフトクリームを食べる。

観光バスが止まって、観光客が歩いている。ここは間人である。観光客が目指しているのは立岩（たていわ）である。干潮だからか、砂州でつながっていて立岩まで歩いて行ける。十数人の観光客が砂州を歩いている。お日様が陰った海の黒い青、砂浜の茶色い白、空はオレンジ色になりかけた青から、白みがかった青が上に行くほど濃い青になる。その中に突然黒くそそり立つ立岩。夢の中、映画の中にいるようだ。

（（注）間人が難読地名とも気が付かずにいた。読めない地名はたくさんあるが、難読地名とも気が付かないのが一番難読だ。「たいざ」と読む。地名の由来は、聖徳太子の生母、間人（はしうど）皇后から来ているという説もある。そしてここで獲れるズワイガニは特別に間人ガニと呼ばれて幻のカニなのだそうだ。実は観光バスのお客さんたちの一番の目的は立岩ではなくてカニだったのかもしれない。）

暗くなりかけてくる。そろそろテントを張る場所を見つけなければならない。港へ下ってまた細い道を上り始めたところにあったお店でキャンプのための水を買う。お店のおかあさんに「晴れていても傘を持っていけという土地ですから」ときれいな共通語で言われる。今日は一日本当に気持ちの良いお天気だった。ありがたい。

「宇川温泉よし野の里」という大きな看板がある。看板で道を右へ折れて、温泉をめざして道を上っていく。温泉の駐車場にでもテントを張らせてもらえないだろうか？すると温泉のすぐ下にキャンプ場がある。温泉のフロントでキャンプができるか聞いてみると大丈夫だという。値段を聞かずにお願いすると、五六五〇円なり。もう暗いしまあいいか。テントを張ってからお風呂に入りに行く。

宇川小学校の生徒たちの地元の魅力をきくアンケート用紙が休憩テーブルに置いてある。素晴らしい教育方法だと思って真面目に書いて段ボールで作ったポストに入

れる。小学生たちから礼状が来たら嬉しいな。催促するわけではないけど。

テントでペミカン（登山用保存食。基本はひき肉を塩コショウ炒めてラードで固めて、ビニール袋に入れて空気を抜いたもの）を入れてご飯を炊く。半分食べて半分は明日の朝ごはんである。

シュラフに入って目を閉じると、海岸までは一キロ以上あると思うが、波が海岸で砕け散る音の迫力がはんぱない。薄い布一枚で地球のエネルギーと一体感を味わえるところがテントのいいところ。ところが夜、寒くて目が覚める。五六五〇円だったら快適なビジネスホテルに泊まれるな、などとぼやきながら合羽を出して上に着こんでシュラフの中でちぢこまる。

十二月十五日（水）

宇川温泉から福井県小浜漁港

朝、走りだすとしばらくは海の断崖の上の台地の平坦で快適な道が続く。自衛隊のレーダー基地があり、「警告　合衆国（施設）在日合衆国軍隊」と看板がある施設がある。ここは地理的に軍事の要所なのだろう。下関から日本海岸を走ってきたが、レーダー基地など初めて見た。北朝鮮のミサイル発射もここで探知しているのだろうか。

丹後半島の先端の経ヶ岬に着く。灯台までは駐車場から歩いて十五分だそうだが行くのを省略する。ここにバス停の広場があって通学の子供を送りに来ているのだろうか、車が二、三台止っている。

経ヶ岬から若狭湾が始まり、丹後半島の道は南下し始める。途中で伊根の舟屋（いねのふなや）を見に行くために道を左に折れる。舟屋とは、家の一階が船の倉庫でその間口はすぐ海に面して建てられて、そしてその倉庫というか舟庫の上に人が住めるように二階建てになっている造りの家である。その同じ造りをした家が軒を連ねて伊根湾を取り囲んでいる。観光案内所の写真には、伊根湾に何艘もの舟が出て魚を取り囲んで漁をしている古い写真がある。写真を見ているとザトウクジラが仲間とバブルの網で魚を取り囲んで魚を取る漁を思い出させる。舟屋の集落を生み出すほどに、伊根湾の海は豊かだったのだろう。

丹後半島の付け根には天橋立がある。天橋立のおかげで宮津湾をかなりショートカットできるのだからうれしい。まさに天橋立は橋である。天橋立は歩くにはかなりの距離なので、レンタサイクルで走っている人とときどきすれ違う。

天橋立は有名ではあるが、今まで走ってきた道から見た景色に比べて、とりたてて景色がきれいなわけではな

い（高台のビュースポットから見たら美しいかも）。地図で見ると、こんなにも細長い橋が湾に架けられているのがあまりにも非現実的で、神様が架けてくれたのではないかと考えたくなる。古代から天橋立が有名なのは、自然が多くの豊かさをもたらしてくれる奇跡を、奇跡的にできた天橋立が象徴しているからではないか。

舞鶴湾は日本海で唯一の軍港であった。私は道から自衛隊桟橋に縦列駐車している四、五隻の艦艇を自転車で横目で見ただけで舞鶴を通り過ぎた。舞鶴湾から吉坂峠を越えると京都府から福井県に入る。ここも「福井県」と「高浜町」の看板が二つ。丹後の国から若狭の国へ入る。

今日は小浜漁港でテントを張る。海が目の前にあるが、湾の中なので、昨日のような迫力のある波の音は聞こえない。穏やかな夜である。昨日の夜の寒さにこりて、しっかりと着込んで寝る。

十二月十六日（木）

小浜から越前海岸鉾島（ほこしま）

朝、今回の旅で始めてコンビニのお世話になる。旅人の都合だけど、コンビニはあまりにも日常の風景なので旅の風情がなくなる。今回はコンビニを見かけることが最も少ない旅である。

三方五湖（みかたごこ）へ向かう道路のマンホールには梅がかたどられている。今走っている道も梅街道と呼ばれて続いている。左手に見える三方五湖との間は細長い梅園が続いている。

三方五湖の道の駅に着くと、湖上の小舟に人が立ちあがって、舟を走らせながら長い棒で湖面を打ち付けている（家に帰ってきてたまたま見たテレビ番組で、竹で湖面を打ちつけて、冬の寒さで寝っている魚をたたき起こして網で捕まえる三方五湖の冬の漁を紹介していた。カチ網漁というらしい。たまたまテレビで見なければ、何をしていたのか謎のままであった。テレビ番組によると、三方五湖の鯉やフナは細い用水路でつながっている水田にわざわざ行って産卵をするのだそうだ。どこでそんなことをフナは学習したのだろうか?）。三方五湖の道の駅の隣に福井県里山里海湖研究所の立派な自然観察棟があるのだが、朝が早いのでどちらも開いていなかった。

敦賀市に入る手前に「パティスリー　プルミエ」という看板がある。ここでも通り過ぎてから引き返してお店に入る。今回の旅のモットーは「恐れずに引き返す」である。

長男がパティシエになりたいと大阪の専門学校に行っているので、洋菓子屋さん（パティスリー）を見つけたら偵察?に入ることにしている。お店の外で縁石に腰か

けてケーキを食べていると、隣にあるカフェからオヤジさんが出てきて、「ありがとうございます。カフェで是非休んでください」と声をかけてくる。ここのオーナーかと聞くと、オヤジさん本人がお菓子を作っているのだそうだ。そしてカフェも隣のパン屋さんも、オヤジさんのお店なのかと聞くと、娘さんがパンを焼いているのだそうだ（今噴煙を書いていて、『まっぷる』にプルミエカフェとして紹介されていることに気がつく。カフェも偵察をしておけばよかった）。

敦賀湾が一番引っ込んでいるところにある気比（けひ）の松原がある。気比の松原は万葉集にも詠まれる昔からの景勝地であるそうだ。天橋立もそうだったけど、松林をあまり美しいと感じないのはなぜだろうか。北海道でカラ松林を嫌になるほど見ているからだろうか。

敦賀では美味しい海の幸を味わおうと、『ツーリングマップル』に全国からお客さんがやってくるお店と紹介されている「うお吟」というお店をわざわざ探して行く。十一時を過ぎたばかりの時間だったので、待たずに座れる。海鮮丼を注文する。隣の人に出てきたどんぶりにはカニが丸ごとのっていてどんぶりからはみ出している。思わず写真を撮らせてくれとお願いしたくなるくらいに豪華で美しく盛り付けをしてある。でもこのお店で一番良かったことは、着物を着た仲居さんに自転車の旅頑張ってくださいと言われたことである。美味しかった思い出は思い出しても美味しくならないが、人の親切は思い出すとこころが温かくなる。（このお店も『るるぶ』で紹介されていることを今発見する。「十一月七日～三月は越前がにスペシャル丼五四七八円が登場。」と書いてある。隣の人のどんぶりは何だろうとメニューを探したけれどもなかったはずだ。（カニの名前が松葉ガニから越前ガニに変わるように、敦賀市から若狭の国が越前の国になる。）

敦賀の港の出口には道の上に見上げるような巨大クレーンが二台あってお見送りをしてくれる。港から上りの道に入ると、タイヤ四本にチェーンを履いたタイヤショベルが轟音とともに私を追い抜いていく。雪道でもないのに何でチェーンを履いているのだろうと謎を抱えて走っていると、路肩にある広場にチェーンを履いたタイヤショベルが駐車してある。ここから先にも数か所にタイヤショベルが駐車してある。十七日の夜からの大雪に備えて除雪用のタイヤショベルを配備しているのだろう。

敦賀湾の終わりに「河野北前船主通り」と書かれた石灯籠がある。そして山側に「北前船主の館右近家」の看板がある。またも建築物見学ツアーを始める。和風建築は建物の中に入る度にブーツのひもを解いたり、結んだりするのが少し面倒だ。

ここは断層海岸地形だそうで、断崖と海岸の細長い隙間に北前船主のお屋敷が並んでいる。なんでこんな狭いところにお金持ちが邸宅を建てたのだろうか？海の男は私のような山の中で育った人間と違って、海が目の前にあれば狭いと感じないのだろうか。久美浜の豪商稲葉本家の宝蔵には不寝番の男衆を一人つけていたそうだが（番人の給料は一年に米一俵）、断崖と海に囲まれて財宝を守るために好都合であったからだろうか？

登るのも大変な断崖の中途に、昭和九年に建てた西洋館がある。一階はスパニッシュ様式、二階は旧岩崎邸のビリヤード館のようなスイスのシャレー（山小屋）風になっている。大不況の時のお助け普請（村人の働き口）として二年間かけて建てられたのだそうだ。

越前海岸を走っていてトイレに入るとちょうど小雨が降ってきて合羽を着る。天気予報を見ると8ミリの雨。ビビる。雨が降り出してうす暗くなってくる。雨に濡れないテントを張る場所を探しながら走る。越前岬は水仙の群生地らしい。「水仙ランド」、「水仙ドーム」、「越前水仙の里公園」が順々に出てくる。水仙ドーム（温室）の軒下でも借りようかと思うが、雨の中を走りながらもきっと良い天場があるだろうと、根拠もなく気持ちは明るい。こんなことはあまりないことだ。

海岸沿いの細長い公園にトイレがある。トイレの軒が出ていて、少しは雨がしのげそうなのでここにテントを張ろうと思う。トイレから階段を上ってその先を見ると、なんと東屋がある。目の前には荒海を隔てて柱状節理の岩でできた鉾島（ほこじま）がある。この公園をつくってくれた鉾島がとてもありがたく見える。

十二月十七日（金）

越前加賀海岸国定公園鉾島園地から石川県小松市

天気予報では一晩中雨が降る予報であったが、雨は降らなかったらしい。テントが濡れていない。朝食を食べてテントをたたみ始めると雨が降り始めて東屋に吹き込んでくる。

最終日の今日は冷たい雨の中を気持ちを途切れさせないように自分に言い聞かせながら走る。気持ちが途切れたら、もうペダルを踏む気力がなくなってしまいそうだ。

東尋坊では狭い道を自転車を引いて歩きながら見学をする。観光客は私と若い男の人だけだ。彼は傘もささずに柱状節理の岸壁の上を歩いている。

芦原（あわら）温泉（福井県最大の温泉街）にある直売所に入ると焼きいもを売っている。ここらあたりはサツマイモが特産なのだそうだ。店員のお母さんに熱心にすすめられるが、あまりにもでかくて、食べきれないので残念ながらにおいだけを楽しむ。

細長く伸びる北潟湖の終わりにある吉崎御坊　蓮如上人記念館に入ると、おじさんが熱心に説明をしてくれる。私は日蓮上人と蓮如上人を勘違いしていた。吉崎御坊を過ぎると福井県から石川県に突入だ。ここも「石川県」と「加賀市」の看板だけだ。越前の国から加賀の国にはいる。雨も止んで合羽を脱ぐ。

今回の旅のテーマの一つは山なのだろうか？加賀市大聖寺（だいしょうじ）には「深田久弥（ふかたきゅうや）山の文化館」がある。複雑な街並みを探してたどり着く。ここでもおじさんが案内をしてくれる。深田さんは加賀市大聖寺生まれ。深田さんは東大の哲学科を卒業してまずは小説家としてデビューした。それから山の文学を書いたのだそうだ。山はスポーツではなくて文学であると考えていたそうだ。一番の深田さんの功績はヒマラヤ研究だそうだ。私は深田さんのお名前は知っていたが、本は読んだことがない。

建物は明治時代に建てられた、絹織物の会社の事務所であり、一日ゆっくりとしたくなるような味わいのある雰囲気で、「加藤文太郎記念図書館」と同じように、書棚一杯に膨大な山岳図書が集められている。

地図を見ると橋立（ここにもはしだてといいう地名が）に「北前船の里資料館」がある。ここにも建築物見学をするために行くことにする。途中の和菓子屋さんで立ちよって、お店のおかあさんと、「雷の音が聞こえますね、稲光も見えましたよ」などとお話をして、かなり前から雷、稲光があるのに雨が降ってこないから、ここの雷は鳴っても雨は降らないのだろうか？などとのんきに考えていた。雷を聞きながら港への道を下り始めると、にわか雨が降り出す。どこにも雨をしのぐところがない。左の小道におれて、灌木の下で、合羽を慌てて着る。雨宿りをするところも見つからないのでそのまま道を下っていくとしばらくして雨が止む。

北前船主の屋敷である蔵六園にたどり着く。蔵六園のなかにある喫茶店の中では石油ファンヒーターが焚いてあって、その前に四つん這いになって濡れた服を乾かさせていただく。橋立は北前船主の邸宅が四十八もあって、日本一の富豪村と呼ばれていたそうだ。

あとは小松へ向かって走るだけだ。一時止んだ雨が降り始める。少々濡れてもホテルが待っている。自転車道路の看板があるので行ってみると、波が堤防にぶつかって波しぶきが道路にかかる所もある。少し走ってみて、ここから先を走ったら波にさらわれそうな身の危険を感じたので、自転車道路から車道へ戻る。風は強いが追い風なので本当にありがたい。追い風に押されて自転車を飛ばす。

ちょうど三時に小松の駅に着く。少し駅から離れたと

ころにあるアパホテルのフロントのお姉さんは、雨に濡れた合羽姿の汚いおやじをいろいろと親切にしてくれる。感謝。

ホテルから金沢に住む友人に川辺から教わった番号に電話をする。友人の沢田の職場に電話がつながる。沢田とは水産学部の寮で一緒に過ごした。六時半に迎えに来てくれるという。ホテルで一週間お世話になって汚れた衣服を洗ってから乾燥機に放り込んで、ひと風呂浴びる。

洗ったばかりの服を着てホテルの玄関に階段を下りていくと、六時半ぴったりに沢田が車で迎えに来てくれる。地元の回転ずしに連れて行ってもらう。山下ともそうだったが、話すのは子供たちのこと。沢田の子供たちは男の子二人が大学生になって、女の子一人が高校生だそうだ。早くに離婚をしてご両親は近くに住んでいたそうだが、男手一人で子育てをしたそうだ。

十二月十八日（土）

小松市（加賀の国の国府）から福井県立恐竜博物館を往復

昨夜は大荒れになる天気予報であった。朝起きて真っ白な世界を期待してホテルの窓から見下ろすと、二、三センチくらいの積雪である。これくらいの雪であったらどこかでテントを張って自転車で走れた。

丸一日空いた。何をしようか。ホテルで朝から晩まで本でも読んでボーっと過ごしたい。が、せっかくの旅先にいるのだから、汽車に乗ってボーっとすることにする。スマホのグーグルマップを開いて目的地を永平寺にして、ポチっと押す。小松駅九：〇一発、芦原（あわら）温泉駅で永平寺行きのバスに乗り換えると表示される。サンキューグーグル。

汽車に乗ってから、『るるぶ（観光案内雑誌）福井越前　若狭　恐竜博物館』（特別付録で「恐竜博物館パーフェクトブック」と「豪華厳選かにブック」が付いています。）についている地図を見ていると、福井駅から出ている「えちぜん鉄道勝山永平寺線」を発見する。鉄道好きな私としては、バスではなくて汽車で行くことにする。そして永平寺ではなく終点の勝山まで行くことに予定を変更する。終点勝山には福井県立恐竜博物館がある。

勝山へ向かって標高が高くなるにつれて、車窓から見える積雪量がだんだん多くなっていく。勝山駅の前にある恐竜の頭と背中には二、三十センチ雪が積もって、隣にいる恐竜の子はほぼ雪に埋まっている。「パーフェクトブック」によると、これはフクイサウルス。フクイサウルスは全長五メートルだから、これは実物大の模型。勝山では五種類の新種恐竜が発見されている。駅からのバスの中は五組くらいで、ガラガラである。恐竜博物館

はあまり人気がないのかと心配をしていると、博物館の駐車場はほぼ満杯だ。家族で来るならみんな車で来るよな。子供たちは汽車の旅も楽しんで欲しいけど。

博物館の入り口に、受付の人が四、五人もいる。何かと思うとコロナのために入館を制限していて、予約がないと入館できないそうである。何も知らずに来た私はドギマギする。この時間帯はまだ予約に空きがあるということで、受付で名前と住所を記入して入館することができた。

館内では親が立派な恐竜図鑑を開いてほんの小さい子供と歩いている。ＮＨＫのラジオ番組のこども科学相談を聞いていても、恐竜小僧は驚くほどに恐竜に詳しい。

この博物館は世界三大恐竜博物館の一つで、建築家の黒川紀章の設計で、建物を目当てに来館する人もいるそうだ。福井県！こんな辺鄙なところにこれだけのお金をよくかけた。あっぱれ。勝山に造ったからこそ、「えちぜん鉄道」も利益が増えるし、素晴らしい。

恐竜にはあまり興味はないんだよなあっと心の中で思いながらも、展示と解説をしっかりと読んで、できるだけ理解しようと努めながら歩く。若い男性がガイドツアーをしている。カンブリア紀の絵を見て、「なぜカンブリア紀に生命の爆発が起こったのか、この絵を見てわかりますか？」。若い女性が「眼が付いている」と答える。「ハイ正解です」。なるほど眼か！眼ができると、捕食能力が格段に高まる。そのために淘汰圧が高まる。淘汰圧が高まると進化のスピードが速くなるというのだ。「光スイッチ説」というらしい。

恐竜の絶滅したのは知っていたが、それ以前にも四回の生物種の大量絶滅があったということだ。そのたびに生き残った五から二〇％ほどの生物の種が進化をして、生物の多様性がまた生まれることを繰り返している。進化のスピードは結構速いのだなあと感心をする。

「海の中の白亜紀末大絶滅」の解説板には「恐竜類の絶滅で有名な白亜紀末には、海の生態系も大きな影響を受け、海生爬虫類やアンモナイト類などが絶滅しました。その原因として隕石の衝突が良く知られているため、大絶滅は短期間で起こったイメージが強いかもしれません。一方で海生動物の化石を調べると、（略）アンモナイト類や海生爬虫類は徐々にその多様性が低下したことがわかっています。このことから、後期白亜紀の海洋生態系は次第にその多様性が失われた後に、隕石衝突などにより「とどめを刺された」のかもしれません。」と解説されている。

地球の歴史年表が壁に描かれている。床から一メートルの高さに、絵巻物のように地球の四十六億年の歴史が時間の間隔と年表の長さを比例させて壁に描かれている。

十メートルくらいのかなりの長さを地球の歴史をたどりながら歩いていく。私のメモ帳に「地球の時間軸の中で、人類は二㎝にみたない。四四〇万年前」と書いてある。地球の歴史から見るとあまりにもちっぽけな人類の歩みにショックを受けた。（今、この原稿を書きながら恐竜博物館に電話で確認をしてみると、一億年が三十センチの年表なのだそうだ。この年表は十三・八メートルあったわけだ。人類の誕生が四四〇万年前だとすると、一・三センチだったわけだ。われわれホモサピエンスが生まれてからは〇・六ミリになる。）

恐竜博物館からの帰りは、九頭竜川（くずりゅうがわ）に沿って走るえちぜん鉄道の周辺はもう日が陰っている。寒々とした河原の風景が広がっている。もう永平寺に行く時間はない。見上げると空は嵐の後の雲一つない青空である。後ろを振り返ると、九頭竜川の奥の雪山の稜線が残照に照らされている。赤兎山（あかうさぎやま）から大日山（だいにちさん）へ続く稜線だろう。稜線にまとわりつくように雲がかかって、そのすぐ上に満月が浮かんでいる。

後記

天橋立

天気予報が十七日の夜から大荒れであったので、日程を一日短縮することにした。そこで若狭湾は最短距離の道を選んだ。その時は湾や半島が旅の障害物のように見えた。旅が終わってから地図帳を開いて改めて若狭湾を見ていると、岬と湾が出たり引っ込んだり若狭湾は自然の芸術作品だ。海岸線の道をまた走りなおしたくなる。

私の生まれ育った長野県の内陸は峠を越えると文化が変わると言われるが、日本の文化や生物の多様性は複雑な地形が生み出したのだろう。

大量絶滅

インターネットで大量絶滅について調べてみると、現在は六度目の大量絶滅が進行中だというのだ。今回の絶滅が特殊なのは、それを引き起こしているのはホモサピエンスの活動であることだ。ホモサピエンスの活動は恐竜博物館の年表の長さにしてみると〇・六ミリである。

この現在の大量絶滅はこれまでに地球で今までに起きた大量絶滅よりも百倍速く生物種が絶滅しているという説もある。コウノトリもエゾオオカミも絶滅してしまった。

地質学的な時間でみると、現在起きている大量絶滅の速さは絶望的である。しかし自分の生きる時間で現在をみて、我々ホモサピエンスの生き方を変えていくしかない。

豪商稲葉家のぼた餅と脊柱管狭窄症

メモ帳を持って自転車旅行をしたのは、今回が初めてだ。メモなど付けないかと思っていたら、夜にテントのローソクの下で書いた。メモ帳に「ローソク二本必要」と書いてある。ローソクをいつもの倍使ったのだ。

「(自転車で) 走っていると、いろいろなことを考えているのだが、今書こうと思うと忘れている。夢のようなものか?」と書かれている。忘れてしまうとは何だろうか。覚えているとは何だろうか。今まで旅先でノートを取らなかったのも、忘れてしまうものは、自分にとって大したことではないと思っていたからだ。

稲葉家の宝蔵、太平洋戦争、兄弟の戦死。ぼた餅につられていなければ、通りすぎていて、忘れる以前に私とは出会うこともなかった稲葉家の記憶。そんな多くの記憶が世界にはあふれている。

「忘れ去られていく日々には意味がないのだろうか」、などと考えてしまったのも、『ユング自伝 (ユングはスイスの精神科医・心理学者)』を朗読本でここ数年にわたって繰り返し聞いているからだろう。ユングの幼いころからの夢を含めた記憶があまりにも強烈だから、私の記憶がちっぽけに感じるからだ。

偉大な心理学者のユングの記憶と自分の記憶とを比較するのがそもそも間違っている。

脊柱管狭窄症になってから、太ももの付け根がつったように痛くなる時がある。そんなときは朝、布団からの起き上がり方、布団のたたみ方、一歩を踏み出す時の足の出し方、座っているとき・立っている時の姿勢、寝るときの寝ころび方など、痛くならないように一つ一つの動作を意識してする。禅に「行住坐臥」という言葉があるように修行の一日である。

そんな忘れ去られていく日々の生活である。